

中原中屋敷遺跡 1 次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

中津市教育委員会

序

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出・稼働を受け工業の町としての新たな側面を見せはじめています。

令和元年度の試掘・確認調査件数は前年度よりやや減少し、本発掘調査は公共工事、民間開発に伴うものを中心に実施しております。今後、東九州道などへのアクセス道路、インター周辺の開発等が予想されるため、埋蔵文化財を取り巻く状況の厳しさは続くことが予想されます。しかし、文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかななくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市大字中原 228 外の集合住宅建設に先立ち、中津市教育委員会が実施した中原中屋敷遺跡 1 次調査の発掘調査報告書です。調査により中世の堀跡や土器などが発見され、中原地域及び中津市の歴史を考える上で貴重な調査となりました。

本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました濱野明様をはじめ、関係各位、及び調査に従事して下さった方々に対し、深甚から感謝申し上げます。

令和 2 年 2 月 14 日

中津市教育委員会

教育長 栗田 英代

例 言

1. 本書は中津市教育委員会が、平成 31（2019）年度に行った集合住宅建設に伴う中原中屋敷遺跡 1 次調査の報告書である。
2. 発掘調査費及び報告書作成業務費は施主の濱野明氏が負担した。
3. 確認調査は末永弥義が、本調査は浦井直幸が担当した。
4. 現場作業は、臨時職員の甲斐嘉夫、加来晴美、後藤満廣、末廣洋子、祐成本文、武吉香子、中上好孝、松嶋博、山本賢一の協力を得た。
5. 遺構の実測・撮影、遺物の撮影は浦井が行った。遺構図浄書・遺物実測等は、臨時職員の岩男純子の協力を得た。
6. 現場で用いた座標は世界測地系による。
7. 遺構の表記は次のとおりである。**SD = 溝状遺構**
8. 図面等記録類は中津市歴史博物館に、出土遺物は旧東谷小学校体育館に保管している。
9. 出土土器については、山本哲也氏（大分県立埋蔵文化財センター）の教示を得た。
10. 本書の執筆・編集は浦井が行った。

目次

序
例言

第1章 調査の経過と組織	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法と成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査の成果	4
第4章 総括	8
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 中津市内主要遺跡分布図	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 遺構配置図	4
第4図 SD1 出土遺物	5
第5図 SD1・3・4 平面図、土層断面図	6
第6図 SD2 平面図・土層断面図、出土遺物	7
第7図 検出時出土遺物	8

表目次

第1表 出土遺物観察表	9
-------------	---

写真図版目次

写真図版1 調査区全景	
写真図版2 SD1 西 SD1 南 SD1 西から南	
写真図版3 SD1 南 SD2 SD1・3・4 SD4 断面状況 出土遺物	

第1章 調査の経過と組織

第1節 調査の経過

平成31年2月26日、中津市大字中原字中屋敷228外地内の埋蔵文化財包蔵の照会がなされた。予定地は周知遺跡外であったが、平成29年8月17日に行った中津市中近世城館確認調査の踏査によって、既に土塁や堀跡を確認していた⁽¹⁾。今回の開発は予定地を大規模に切土し集合住宅を建設するもので、遺構が破壊されることは避けられない計画であった。そこで、予定地を新たに遺跡へ登録すること、登録された場合は文化財保護法第93条の届出が必要になることを集合住宅建設会社へ伝え、了承を得た。

平成31年3月4日、予定地を「中原中屋敷遺跡」として新規遺跡へ登録し、遺構の存在が想定される北側の小字上屋敷を含む一帯をその範囲とした。3月5日、県文化課へその旨報告し、3月15日付け文書にて遺跡台帳へ追加した旨が通知され、建設会社へその旨連絡した。

平成31年4月4日、工事主体者より文化財保護法第93条の届出が提出された。これを受けて、5月9日確認調査を実施し、幅1.5m、長さ13.5mのトレンチを設定し掘削を行った。その結果、地表面から1.0～1.2m下位にて小ピット4基を検出した。合せて、同地の北西・南西辺に沿って、幅約2.5～3m、深さ約1.0mの大規模な溝状遺構（堀）が残存していることを再確認した。そこで、建設会社へ工法変更による遺構の保存について協議をもった。しかし、工法の変更は困難との結論に至り、遺跡を記録保存するための本調査を行うことが決定した。本調査範囲は切土される計画地全体とすべきであったが、費用が多額にのぼるため、大規模溝状遺構とその肩から2～3mの範囲に限定し行うこととした。6月4日、工事主体者と発掘調査委託契約及び埋蔵文化財発掘調査業務等協定書を締結し、6月6日から6月25日まで本調査を実施した。例年であれば梅雨の最中であるが、空梅雨が幸いし調査は順調に進捗した。

調査の結果、大規模溝状遺構（堀跡）1条、複数の柱穴などを確認した。調査終了後、報告書作成作業を開始し、令和2年2月の本書刊行をもって本事業を完了した。

註1 中津市教育委員会「中近世城館確認調査(5)」『市内遺跡発掘調査概報11』2018

第2節 調査の組織

調査主体	中津市教育委員会
調査責任者	栗田 英代（中津市教育委員会教育長）
調査事務	大下 洋志（同 教育次長）
	高尾 良香（同 社会教育課長）
	高崎 章子（同 文化財室長兼中津市歴史博物館館長）
	花崎 徹（同 文化財室主幹兼中津市歴史博物館副館長）
	河野さくら（同 管理・文化振興係主幹）
	村上 豊成（同 管理・文化振興係主幹）
	速水 誠（同 管理・文化振興係員）
	渡邊奈津子（同 管理・文化振興係員）
担 当	浦井 直幸（同 文化財室文化財係兼中津市歴史博物館員）
	末永 弥義（同 文化財室嘱託）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約8万4千人、面積491km²を誇る。北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。英彦山に源を発する一級河川山国川が市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落は営まれる。頼山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝耶馬溪として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県北最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。

中原中屋敷遺跡は洪積台地に所在し、水田化された浅い谷が東西に延びる中間の台地上に位置している。

第2節 歴史的環境

旧石器時代 市内の遺跡を概観すると旧石器時代の石器は才木遺跡（35）や法垣遺跡（19）で発見されている。

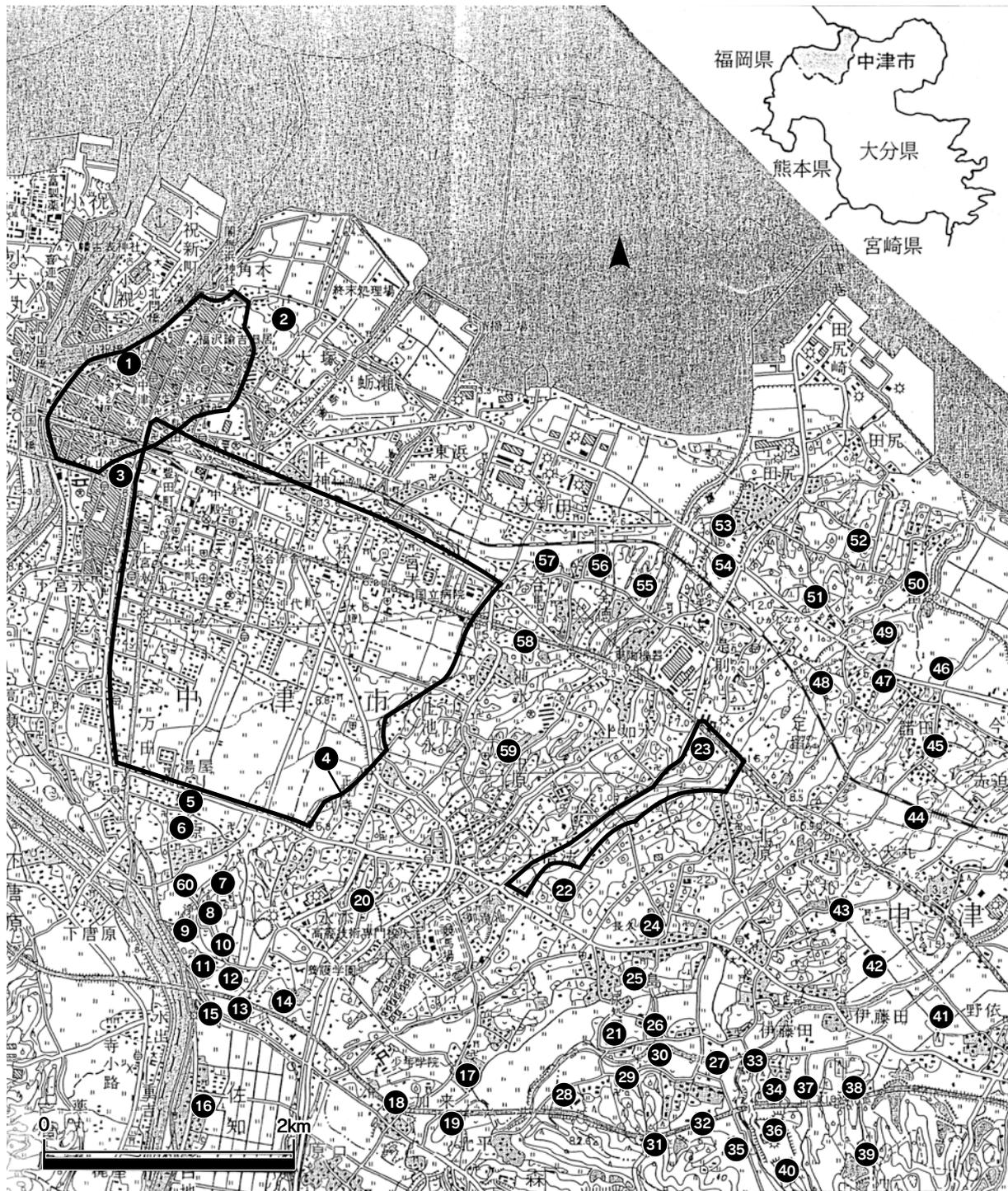
縄文時代 上畑成遺跡（43）で早期の無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡（18）で陥し穴が発見された。遺跡数は縄文後期から増大し、植野貝塚やボウガキ遺跡（21）、女体像と見られる土偶が出土した高畑遺跡がある。法垣遺跡は複数の掘立柱建物が検出され注目されている。

弥生時代 前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）で貯蔵穴群が確認された。続く中期では二列埋葬の土壙墓・住居跡・溝が福島遺跡（25）で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡（28）で検出された。

古墳時代・古代 亀山（亀塚）古墳（58）が挙げられるが、調査せず破壊されたため詳細は不明であるが、近年行った発掘調査により埴輪片が出土している。その他の墳墓の多くは下毛原台地の南西に造営される。5世紀前半には山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓（11）が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群（29）、城山古墳群（34）、城山横穴墓群（33）などが見られる。また、7世紀から9世紀にかけて相原山首遺跡（7）で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡（49）や定留遺跡（51）でまとまって発見されている。古代には7世紀末に百済系の相原廃寺（6）が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には沖代平野に条里制（4）が施行されたと考えられ、条里の南限は「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。8世紀中頃には官道南側に下毛郡衛正倉に推定される長者屋敷官衛遺跡（20）が確認された。須恵器や瓦を製作した生産遺跡は、草場窯跡（37）、踊ヶ迫窯跡（38）、洞ノ上窯跡などがある。集落遺跡としては10世紀代の緑釉陶器や墨書土器が出土した三口遺跡がある。

中世 長久寺の田丸城跡（24）など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城（1）が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

近世 関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632（寛永9）年に完成を見る（2）。1717（享保2）年に奥平氏が入部し、1871（明治4）年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 中津城跡 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 和間貝塚 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ迫窯跡 | 50. 定留鬼塚遺跡 |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畑遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池窯跡 | 51. 是能遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 田尻大迫遺跡 |
| 5. 市場遺跡 | 17. 加来居屋敷遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 舞手橋東段上遺跡 |
| 6. 相原廃寺 | 18. 黒水遺跡 | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 是則遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 法垣遺跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 上畑成遺跡 | 55. 全徳遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷官衙遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 諸田南遺跡 | 56. ガラヌノ遺跡 |
| 9. 坂手隈城跡 | 21. ポウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 諸田遺跡 | 57. 合馬遺跡 |
| 10. 弊旗邸古墳 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 天貝川遺跡 | 58. 亀山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 定留遺跡 | 59. 中原中屋敷遺跡 |
| 12. 勘助野地遺跡 | 24. 田丸城跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 定留貝塚 | 60. 三口遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

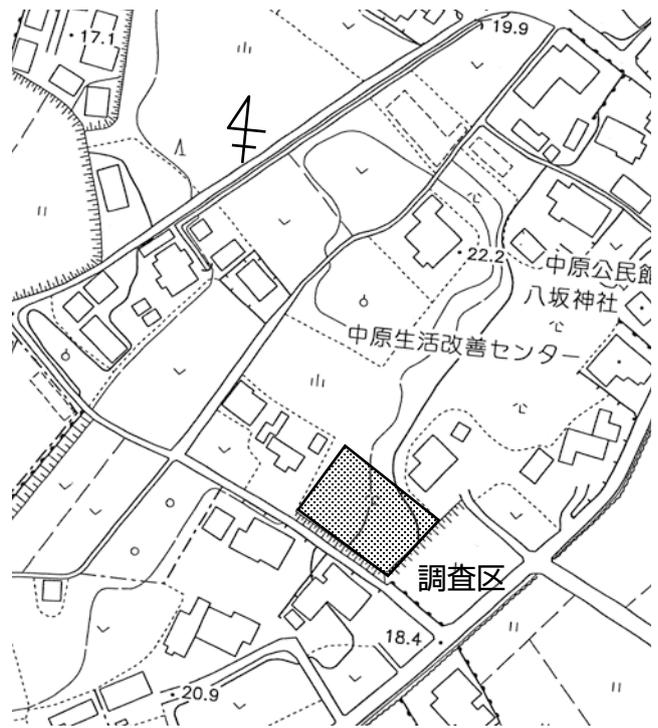
本調査は、まず調査地に繁茂している竹の根の伐根及び清掃を人力で行った。堀跡部分の表土の除去や堀北側平坦面の遺構検出は重機を使用した。堀跡の底部や法面は遺構を損壊しないよう慎重に表土を掘削し、2箇所土層観察用畔を残した。

第2節 調査の成果

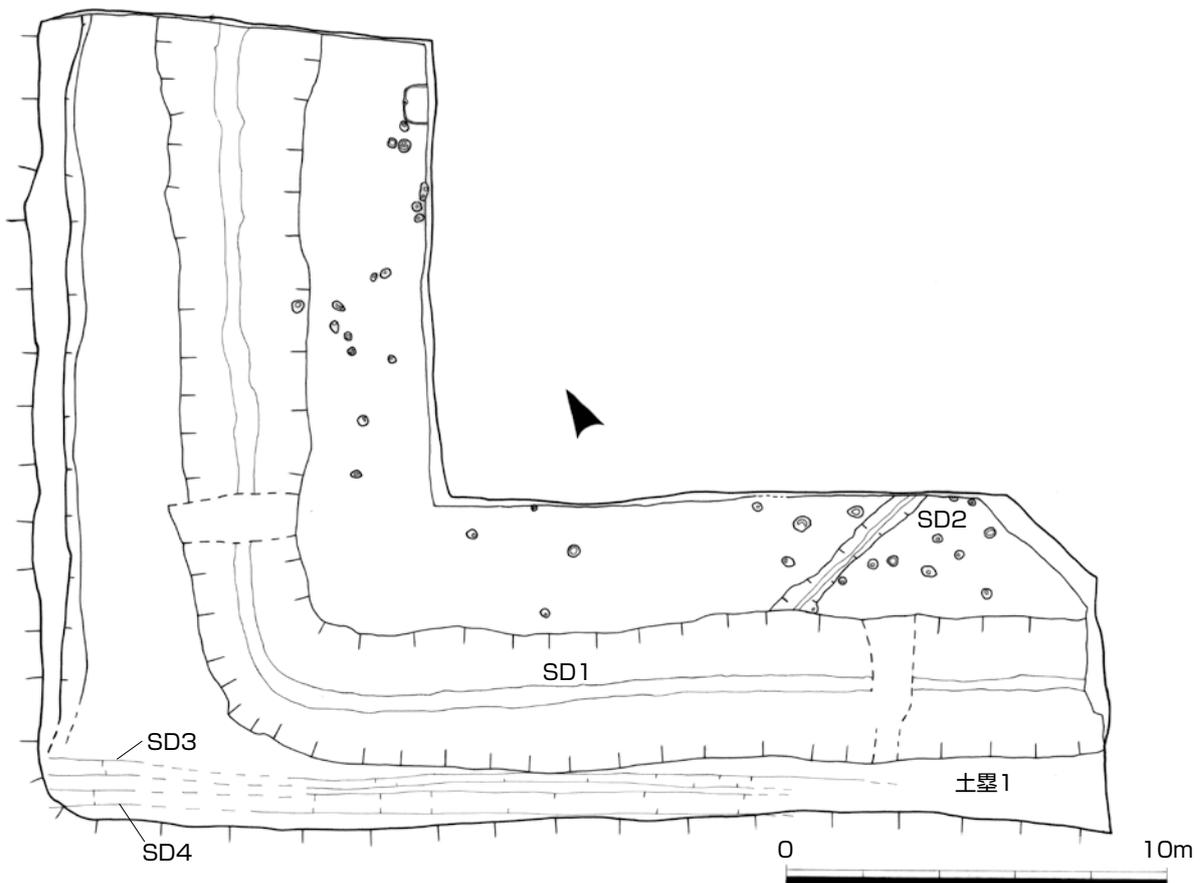
調査の結果、中世の溝状遺構3条、土塁1基、時期不明の溝状遺構1条、時期不明の柱穴を少量検出した。また、調査区外の西側隣接地に今回調査した堀跡と並行する堀跡が1条あり、現況の断面図を作成した(第5図参照)。その他、調査終了後に行った造成工事立会い中に土塁下部から東西方向を指向する2条の溝状遺構を確認した。

遺物は主に堀跡から出土し、出土数はパンケース1箱に満たない量であった。

調査区の堆積状況は、標高21m付近の暗茶褐色のローム層(SD1北壁6層)上にしまりの弱い暗茶褐色砂質土が堆積し、その上にクロボク層である黒褐色砂質土、その上はしまりの弱い暗茶褐色砂質土となる。



第2図 調査区位置図 (S=1/2,500)



第3図 遺構配置図 (S=1/200)

遺構と遺物 (第4～7図)

中世

溝状遺構 (堀跡)

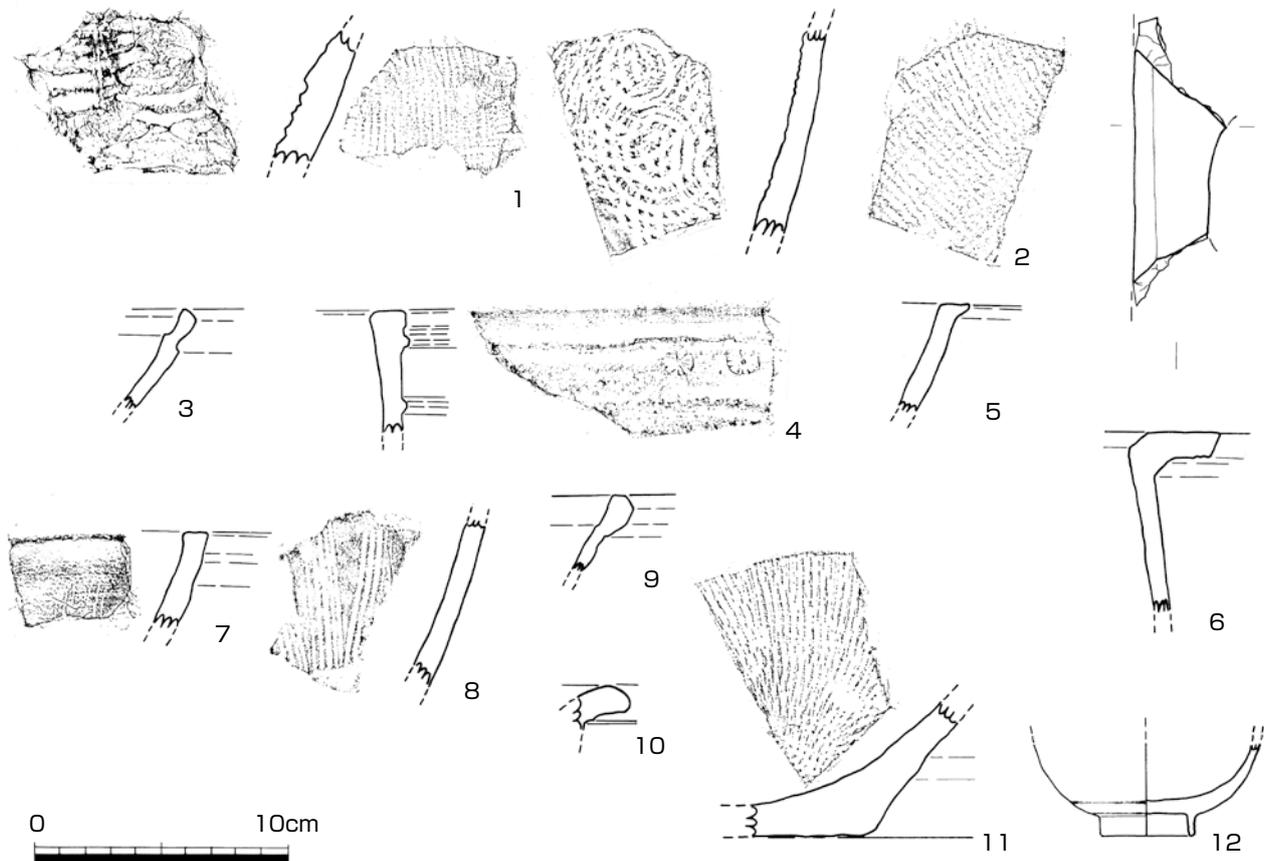
SD1 (第4・5図)

調査区南から西に位置し、L字状を呈する。最大幅4m、深さ2.2m、南側は長さ22.4m、西側は18.6mであり、合計41mの長さを測る。直角に近い角度で曲がるため、屈曲部内側の空間を守るために掘られた遺構であることがわかる。また、SD1の西側にも同規模と考えられる南北方向を指向する溝があり、2条の溝状遺構(堀)でSD1内側の空間を守る意図が窺える。

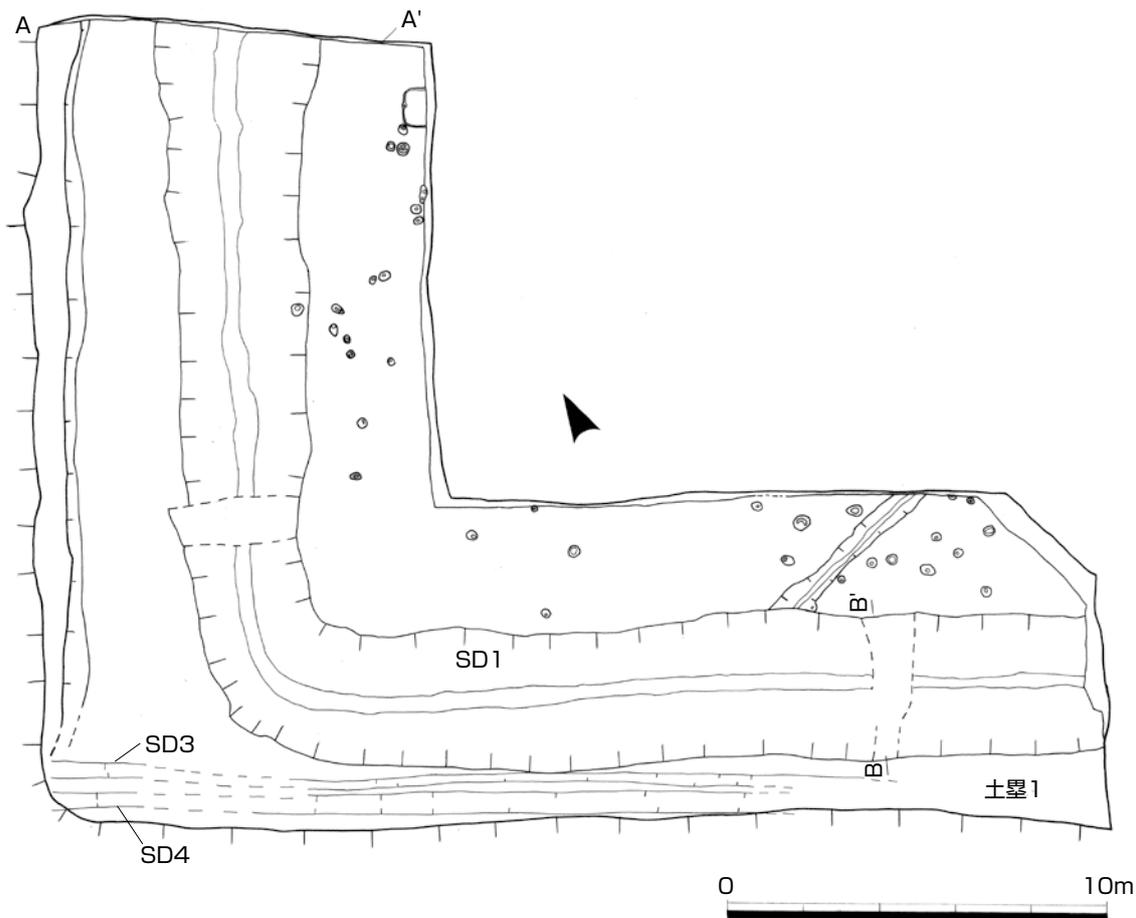
SD1は地山をY字状に掘削しており、底は箱形を呈する。法面にテラスは構築されていない。溝の堆積状況は第5図の土層を見ると北壁では厚さ50cmの5層(ベルト1では3層)が堆積しており、溝の底部分は一度に埋没していることがわかる。続く2層もある時期一度に埋められた状況を示す。その後、これを切るように断面U字状の1層が認められる。この層には近現代のゴミなどが含まれているため、当代に溝をゴミ捨て場として再利用した痕跡と考えられる。

SD1の外側(南・西側)は一段高い地形を呈していた。当初、この地形は旧地形と考えていたが、工事立会い時に南側の下位から溝状遺構を2条検出した。よって、これは人工的な地形であることが判明し、形状からSD1の掘削土を外側に盛った土塁であった可能性が高いことがわかった。この土塁も後世に削られて高さが低くなっていると思われる。

遺物は少量出土した。1・2は須恵器の胴部片。甕か。3～10は瓦質土器。3は鍋の口縁部。4は火鉢の口縁部。菊花のスタンプあり。16世紀前半の資料。5は鉢の口縁部。6は焜炉の一部か。7・8は挿鉢。9・10は口縁部。9は鍋で玉縁状を呈する。10は鉢。11は陶器で挿鉢の底部。12は磁器の碗。18世紀後半代であろう。3・4などから遺構の時期は中世後半代(16世紀代)と考えておく。

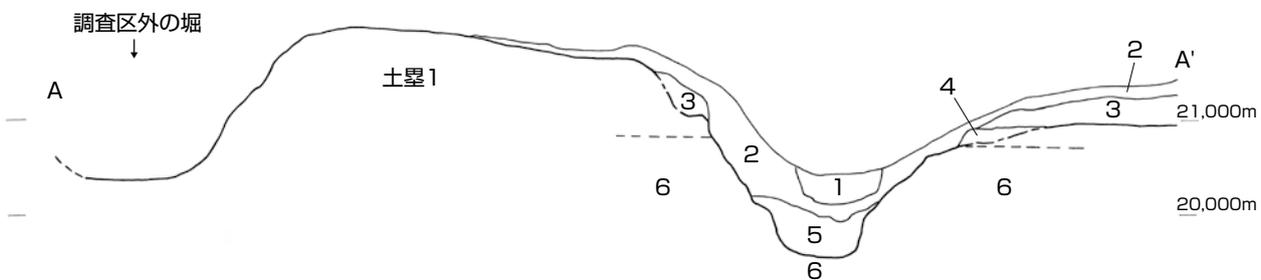


第4図 SD1出土遺物 (S=1/3)

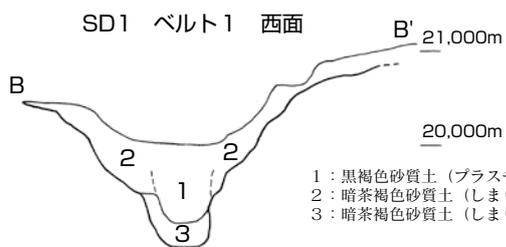


SD1 北壁

(1/200)



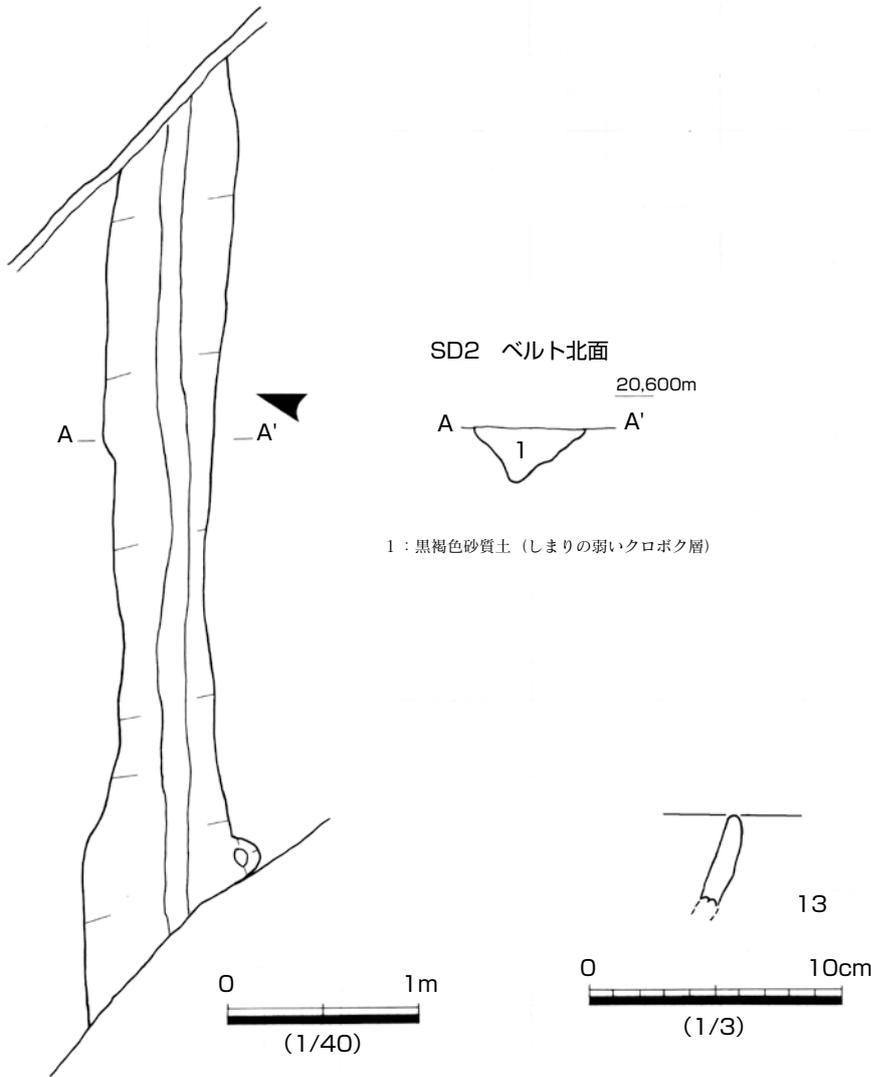
- 1: 黒褐色砂質土 (近現代の掘り込み、ガラス瓶など多数)
 - 2: 暗茶褐色砂質土 (しまりは弱い)
 - 3: 黒褐色砂質土 (クロボク層。土器粒少量)
 - 4: 暗茶褐色砂質土 (しまりはよい)
 - 5: 暗茶褐色砂質土 (しまりは弱い。中世末の土器片出土)
 - 6: 暗黄褐色砂質土 (地山。SD1 底から50cm上位の地山はしまらない)
- ※3層上面が中世の生活面と考えられる。



- 1: 黒褐色砂質土 (プラスチックなどが混入する近現代の層。2層との境分層できず。竹木・根のため)
- 2: 暗茶褐色砂質土 (しまりは弱い)
- 3: 暗茶褐色砂質土 (しまりはやや弱い。中世末の層)

0 2m
(1/80)

第5図 SD1・3・4平面図 (S=1/200)、土層断面図 (S=1/80)



第6図 SD2平面図・土層断面図 (S=1/40)、出土遺物 (S=1/3)

調査を行えておらず平面図も略図である。SD3は長さ約22m、幅約60cm、深さ10cmを測る。SD4は長さ約18m、幅約80cm、深さ20cmを測る。両遺構共浅いため上部は工事によって削られたものと思われる。東側は未検出であるが、予定地の東端まで延びていた可能性がある。

溝状遺構

SD2 (第6図)

調査区中央やや東よりに位置し、北東-南西方向を指向する。長さ4.4m、最大80cm、深さ24cmを測る。遺物は少なく須恵器・土師器の小片が出土している。中世のSD1に切られているため、中世以前の遺構と考えられる。13は土師器。鉢の口縁部か。

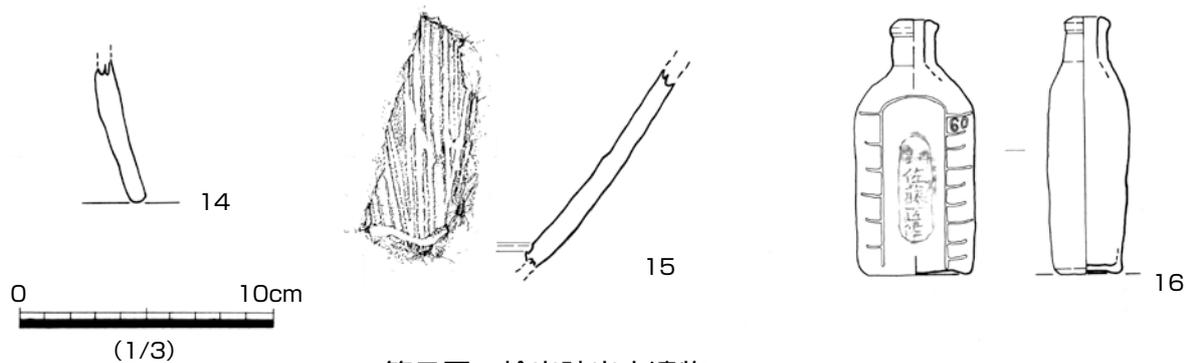
遺構検出時出土遺物 (第6図)

14~16は遺構検出時に出土した遺物である。14は弥生土器。器台か。15は瓦質土器で挿鉢。底部付近に花卉状の挿目あり。16は「佐藤医院」銘のガラス製品。薬品の容器か。

SD1構築は中世と考えられるため、それ以前の遺物は当地に存在していた遺構からの流れ込みであろう。また、近世後半期の陶磁器についてはSD1機能停止以後のものと考えられ、北壁・ベルト1西面2層がその時期の堆積であることも考えられる。SD1北端の底面の標高は、東端に比べると80cm程高い。雨水などは北から東へ流れたと思われる。調査区の地形も東に向けて降っている。ただし、土層で見える限り滞水・流水を示す層序は確認できなかったため、空堀であったと思われる。

SD3・4 (第3図)

本調査終了後、工事立会い中に土塁下位で確認した東西方向を指向する溝状遺構である。北側をSD3、南側をSD4とする。詳細な



第7図 検出時出土遺物 (S=1/3)

第4章 総括

今回の調査では中世の堀と考えられる溝状遺構をはじめ複数の遺構を調査した。遺構の構築順序について整理すると、まず本遺跡では時期は不明だが中世以前にSD2が構築されている。その後、中世には土塁下で確認されたSD3・4が造られる。両遺構は近接するが交差しないことから同時併存していた遺構と考えられる。その機能は、調査地付近に存在した施設を守る堀的な性格を想定でき、その施設の位置は後に構築されるSD1の平面形状から北側に存在したものと推測できよう。SD1の掘削土は土塁としてSD3・4を埋めるかのように構築された。SD1はSD3・4に比して大規模であり、北へ屈曲する点に相違が認められるもののSD3・4同様の平面配置であり、SD1の北に存在した施設の防御に重点を置いていることに変化はない。また、調査区西には北へ屈曲するSD1と並行する形で同規模の堀跡が視認でき（現在埋め立てられた）、さらに調査地南の市道部分も近代まで堀跡であったとの聞き取りを得ている。つまり、SD1北側に存在した施設を中世のある時期、堀で嚴重に防備していた姿を想像できる。小規模なSD3・4から大規模なSD1を新築した動機は、前代より危機意識が高まった結果であろう。

調査区の北側の小字上屋敷にも一部堀跡などが遺存している。また、調査区外西の堀跡は一部屈曲しながら小字上屋敷の方向へ延びている。中世のある時期は堀が集落全体を囲むように築かれるケースがあるという⁽¹⁾。今回の調査では、集落西側の堀が確認されたわけであるが、堀が集落全体を回るのかどうかは今後の課題である。

調査地は最近まで中原氏が居住しており中原氏は近世は庄屋であったという。近世の庄屋層が中世の在地領主層であった可能性は高く、確認された堀跡は在地領主の館を守るものであった可能性が高い。中原氏について『下毛郡誌』では、「弘治2年より大友家に属し、後野仲氏に従い天正15年黒田氏の軍を長岩城に防ぐ」と記載する⁽²⁾。この中原氏と調査地に居住していた中原氏が同じ系譜か不明ながら、在地領主層に中原氏の名があることは興味深い。

今回の調査は、中津の中世史・地域史を考える上で重要な調査となった。また、周辺では過去に発掘調査をあまり行われておらず貴重な発掘例ともなった。今後の調査例の増加に期待したい。

以上、中原中屋敷遺跡1次調査の発掘調査成果とその意義を述べ、総括とする。

註

1. 宮武正登氏（佐賀大学教授）のご教示。また、箱形の堀底の形状から鍬を用いた掘削が行われたのではないかとのお見もいただいた。
2. 『下毛郡誌』大分県下毛郡教育会 1927

第1表 出土遺物観察表

遺物 番号	出土 遺構	器 種	法量 (cm)			残存率	調整	焼 成	胎土	色調	備考
			器高	口径	底径						
1	SD1	須恵器・甕	(4.0)	-	-	(小片) 胴部	内面：青海波 外面：タタキ	良好	精緻	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
2	SD1	須恵器・甕	(7.4)	-	-	(小片) 胴部	内面：青海波 外面：タタキ	良好	精緻	灰白色 (5Y 7/1)	
3	SD1	瓦質土器・鍋	(2.9)	-	-	(小片) 口縁	ナデ	良好	-	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
4	SD1	瓦質土器・火鉢	(4.8)	(3.3)	-	(小片) 口縁	ナデ	良好	-	内外面：黄褐色 (10YR 5/6)	
5	SD1	瓦質土器・鉢	(4.2)	-	-	(小片) 口縁	内面：ナデ 外面：ナデ、上部2.3cm より下はハケ目	良好	-	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
6	SD1	瓦質土器・焜炉	(7.0)	-	-	(小片)	内面：ナデ・ハケ目 外面：ミガキ	良好	-		
7	SD1	瓦質土器・搦鉢	(3.6)	-	-	(小片) 口縁	内面：ハケ目 外面：ナデ	良好	-	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
8	SD1	瓦質土器・搦鉢	(4.5)	-	-	(小片) 胴部	外面：ナデ	良好	-	内外面：橙色 (7.5Y 6/6)	
9	SD1	瓦質土器・鍋	(3.0)	-	-	(小片) 口縁	ナデ	良好	0.1mmの長石・石英・角閃石を微量含む	内外面：橙色 (2.5YR 6/8)	
10	SD1	瓦質土器・鉢	(1.8)	-	-	(小片) 口縁	ナデ	良好	0.1～0.5mmの角閃石を少量含む 微粒子の石英を微量含む 0.5～2mmの白色粒子を多量含む 0.5mmの黒色粒子を多量含む	橙色 (7.5Y 6/6)	
11	SD1	陶器・搦鉢	(5.3)	-	-	(小片) 底部	内面：タタキ目 外面：カキ目	良好	精緻	内外面：にぶい 褐色 (7.5YR5/4)	底部に糸切り痕あり
12	SD1	磁器・碗	(3.8)	(3.6)	-	(小片) 底部	成形：ロクロ	良好	精緻	呉須の色調：濃青色	染付：透明釉 文様：(外面) 丸文・圏線 (内面) 不明・圏線
13	SD2	土師器・鉢?	(3.2)	-	-	(小片) 口縁	ナデ	良好	0.5mmの石英を多量含む 0.5mmの長石を少量含む 0.5mmの角閃石を多量含む	内外面：にぶい 褐色 (7.5YR5/4)	
14	一括	弥生土器・器台	(5.6)	-	-	(小片) 口縁	ナデ	良好	0.5mmの石英を少量含む 0.5mmの長石を少量含む 0.5mmの角閃石を少量含む	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
15	一括	瓦質土器・搦鉢	(7.3)	-	-	(小片) 胴部	内面：ハケ目 外面：ナデ	良好	-	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
16	一括	ガラス・薬瓶	10.0	1.8	4.8 ×3	完形	-	-	-	-	佐藤医院銘あり

写 真 图 版



調査区全景（北東から）



調査区全景（北から）



調査区全景（東から）

写真図版2



SD1 西 (南から)



SD1 西 (北から)



SD1 南 (東から)



SD1 西から南 (北西から)



SD1 南 (西から)



SD1・3・4 (西から)



SD4 断面状況 (東から)



SD2 (北東から)



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな 書 名	なかぼるなかやしきいせき じちようき 中原中屋敷遺跡1次調査							
副 書 名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	中津市文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第95集							
編 集 者 名	浦井 直幸							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒 871-8501 大分県中津市豊田町 14 番地 3 TEL : 0979-22-1111							
発 行 年 月 日	2020年2月14日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中原中屋敷遺跡	大分県中津市大字中原228外	44203	203302	33° 34' 38"	131° 13' 4"	2019.06.06 ～ 2019.06.25	364㎡	集合住宅建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中原中屋敷遺跡	集落、中世城館	中世	溝状遺構	瓦質土器		中世の堀跡を複数検出		
要 約	16世紀代と思われる大規模溝状遺構（堀跡）を確認した。							

中原中屋敷遺跡1次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第95集

2020年2月14日

発 行 中津市教育委員会

印 刷 高橋印刷所